

仲間と一緒に頑張れる

職場
ルポ

— はとふる川内 株式会社 —



デリバリー部門の岡村公生さん

●特集●
特例子会社

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

取材先データ

はとふる川内 株式会社

〒771-0135 徳島市川内町平石若松108-4
TEL 088-666-4205 FAX 088-666-4207
<https://www.heartful-kawauchi.co.jp/>

keyword: 精神障害、身体障害、知的障害、高次脳機能障害、特例子会社、職場環境の整備、トライアル雇用、ジョブコーチ、ピアサポート

POINT

- ① 就労支援の経験者がサポート
- ② 短時間からフルタイム勤務に
- ③ ピアサポートの雰囲気を育む



はーとふる川内 西野直樹社長

「エビリファイで症状をコントロールできている患者さんを雇ってもらえませんか。エビリファイを飲んでいれば就労ができるという証明にもなります……」その手紙を読んだ役員「エビリファイをこの世に送り出した大塚製薬は、精神障害者を雇用していくべき」という考えから、取組みが始まった。そして、精神障害者をどのような形で雇用していくか。検討の結果、特例子会社設立のプロジェクトチームが立ち上がった。

はーとふる川内社長の西野直樹さんは、人事部で障害者の採用に関わった経験があったことから、プロジェクトのチームリーダーを任された。

「会社の中での反発はありませんでしたが、業務をどのように獲得するかが大変でした。いろいろな業者さんとのつながりもありますので、なかなか難しいことでした」

西野社長は、先輩の特例子会社を見学すると、どこも親切に経験を教えてくれた。障害者雇用に対する熱い思いに感動し、親会社から仕事を獲得する大変さもわかちあえた。

「まず、印刷を業務の一つにすることを決めました。名刺印刷をしたかったのですが難しく、ポスター、チラシな

「一通の手紙」から

大塚製薬株式会社の特例子会社「はーとふる川内株式会社」は、大塚製薬あての1通の手紙をきっかけに、2011(平成23)年10月に誕生した。

1964(昭和39)年、徳島県で創業した大塚製薬は、中枢神経、循環器、がん、眼科領域などの治療薬を展開している。一般の人たちにはオロナミンCドリンク、ポカリスエット、カロリーメイトなどでおなじみだ。

数年前のある日、統合失調症などの治療に抗精神病薬「ABILIFY(エビリファイ)」を使った徳島県内の精神病院の院長から、役員のもとに1通の手紙が届いた。



森昌伸管理部長

どを行うことにしました。次にデリバリ(書類配布など)を考え、1年後ぐらいに親会社の生産ラインのサポートを始めました。生産本部長が障害者雇用に理解があり、障害者が工場です仕事ができるように、材料をICタグでシステム化するための投資をしてくれました。このシステムを使えば、海外に工場を作るとき、現地の人たちも間違わずに作業ができると思います」

管理部長の森昌伸さんは東京本社にいて、プロジェクトチームのメンバーを兼任。経理畑の支援をした。

「上からの声ではなく、現場の人々に特例子会社の意義を浸透させていけば、仕事をいただけることを学びました」

会社の使命は全員で考え、「自立・創造・実証・夢・愛情」をkeywordに障害



大塚製業の特例子会社「はーとふる川内」

のある方が働きやすい環境を創造し、夢を持って将来に立ち向かうことができる企業を目指します」とうたった。設立当初の社員のイラストが並ぶ会社案内は、「はーとふるな会社になる！」という1人ひとりの思いを象徴する内容となっている。

相談支援員がサポート

オフィスは、徳島空港と徳島駅のほぼ中間あたり、吉野川の河口近くにある。ビル6階の窓からは、なだらかな山々が遠くに、眼下に徳島の街並みが広がる。明るく、ゆったりとしたバリアフリーの空間で、身体障害者8人（うち車いす4人）、精神障害者14人、知的障害者1人、相談支援員6人と、親会社から出向の管理職4人が働いている。

相談支援員とは、精神保健福祉士、産業カウンセラー、特別支援学校の教員等の資格を持っている人やジョブコーチなど、障害者の就労支援の経験がある社員のこと、採用のとき、経験者を集めた。障害者と初めて仕事をするデザイナーは、入社後にジョブコーチの資格を取得した。

主な事業は、大塚製業のオフィスサポート事業（印刷、IT、デリバリー業務）で、印刷部門はパンフレットやチラシ、あいさつ状、ポスター、横断幕などの印刷、IT部門はホームページの作成やメ



印刷部門

ンテナンス、デジタルデータ化など、デリバリー部門は書類の配布、社員証の作成、携帯の初期設定、販促物の袋詰め、資料作成、キャンペーン応募情報のデータ化などを扱っている。

生産ラインサポート事業は、大塚製業徳島工場と徳島第二工場に出向いて、薬品の原材料の搬送作業や清掃などを行う。さらに今年7月からアグリ事業がスタート。相談支援員2人が異動し、新たに知的障害者2人とサポート役の社員2人を雇用した。農業は癒しの効果もあることから、精神障害者の雇用も視野に入



デリバリー部門



IT部門

WORKSHOP REPORT



パンフレット、チラシの発送梱包作業

れている。

精神障害者もフルタイム勤務に

事業の立ち上げは身体障害者の人たちと相談支援員で行い、体制が整ってきた数カ月後に、精神病院やハローワークからの紹介で精神障害の人たちが働き始めた。

統合失調症、社会不安症、高次脳機能障害、うつなどの障害がある人たちは、トライアル雇用、4時間の短時間雇用から仕事を始め、4〜6時間で調整中の1人を除いた全員が7・5時間のフルタイム勤務となった。

事業部の神崎幸かみざきゆきさんは、ハローワークの障害者支援専門員としての経験を生かしたいと転職した。産業カウンセラー、社会福祉主事、認定心理士の資格を持つ。

「採用時には、自分でSOSを出せる、自分の症状を理解している、服薬のコントロールができているなどを考慮しました。最初は4時間でも疲れたというに、いまはいきいきと7・5時間働いています。同じ障害の方が複数名いますので、ピ



支援員として活躍する神崎幸さん

アサポート的な空気が流れています。お互いを補い合い、認め合っている職場の雰囲気がみんなの力を引き出しているのかと感じています」

森さんも、精神障害の人たちが安定してきたと感じている。

「落伍者は1人もいませんが、当初はいろいろなことがありました。激しい波がゆつたりした波になってきたと思います」

神崎さんは、長く勤め続けてほしいと1人ひとりに細かな配慮を行う。

「就労経験が少ない人が多かったので、ミスが出ないような手順の仕組みを作ってから能力に応じて説明をして、理解してから仕事に取り組んでもらっています。残業もするようになりましたが、長い期間で見れば、調子にリズムがある方たちだと思えます。毎日の表情に気がつ

けて、挨拶、声のトーンなどから、調子がおかしいと思う方とは面談をして、勤務時間や仕事内容を相談しています」

西野社長の発案で、毎日の薬の飲み忘れがないよう、体調管理ができるようなシステムも整えた。

「昨日眠れましたか、心配事はありませんかなどの項目を作り、共有フォルダーを作って、情報をアップしています。データを蓄積していくと、この人は春先に調子が悪いとか、一目見てわかるようになります」

精神障害者を積極的に雇用して、大塚製薬の障害者雇用率は2・36%になった。今年4月には、精神障害者同士のカップルが誕生。「2人を長い目で見守ってほしい」と神崎さんがうれしそうに紹介してくれた。

働くことが喜び

岡村公生きみおさん（35歳）は、大学卒業後、海上自衛隊に入り、22歳で適応障害との診断を受け、通院したり入院したり、薬を飲みながらアルバイトをしていた。

「障害をオープンにして働くことをまったく知らなかったのです、薬を飲んでいくことを隠しながら働いてきました。病院のデイケアでPSW（精神保健福祉士）の方に、『障害をオープンにして働いてみないか』といわれて、『オープンって



デリバリー部門で、タクシーチケットの管理を担当する岡村公生さん

「何ですか？」と聞いてハローワークに行きました。就労移行支援事業に参加して1年間、会社で実習をしていくうちに、仕事に就ける体力がついてきました」

2013年8月にトライアル雇用を経て入社。デリバリー部門で、大塚製薬の営業担当者を使うタクシーチケットを一括管理している。

「最初は電話をかけるのもすごく緊張して、手がぶるぶる震えましたが、最近はそのようなこともなくなりました」

お昼休憩をはさみ、4時間勤務から始め、4カ月ぐらいで7・5時間勤務になった。

「長く勤めていきたいので、体調を崩さないように気を付けてながら仕事を頑張ろうと思います。最初、みんなに受け入れてもらったのが、すごくうれしかったのを覚えています。お互い話はしないのですが、つらい過去があったのだと感じながら働くので連帯感があって、家族のような会社だと思っています。こんないい会社に巡り合うことはないと思うので、働き続けていくことが一番です。働く



特例子会社設立時より働く浅野高弘さん

喜びをずっと味わっていきたいですね」会社のソフトボールチームにも参加している。

「2度と社会で働くことができないと諦めて生活してきた私にとって、いま働くことができるのは施設、病院、会社の方の支えのおかげです。そのことを思うとうれし涙が出ることもあります。病院のデイケアなどに通っている若い人たちには、就労支援があることを知ってもらいたいです」

浅野高弘さん（41歳）は、設立時に入社したメンバーの1人。デリバリー部門で、大塚製薬の弔電、海外駐在者への発送、キャンペーンはがきのデータ処理、

長期休暇、育児休暇のデータ化、スマートフォンでの初期設定など、30種類もの仕事をこなす。

「徳島県身体障害者連合会で緊急雇用創出事業の仕事をしたとき、大塚製薬の特例子会社ができるを知って応募しました」

その前は、障害者福祉と障害者スポーツを勉強するために、ダスキンの障害者リーダー育成海外研修事業に参加して米国のパークレーに1年間滞在した。会社の卓球同好会も立ち上げ、身体障害者アーチェリーの徳島県代表選手だ。

「アーチェリーは6年前から始めました。大塚化学にアーチェリー場があります。サポーターがないと練習できないので月2回ぐらいしか通えませんが、2020年のパラリンピックを目指したいですね。社内は社員が増えて、雰囲気も明るくなっています。業務に関して意見を言い合えるようになっていきます。この会社ですと働き続けたいと思っています」

課題は「加齢」と「生活支援」

設立してまもなく3年。身体障害のある社員は40代・50代が多く、20代が2人と年代が高いため、早くも「加齢」の課題に直面し、神崎さんは頭を痛める。

「会社の支援のあり方の課題として、加齢に伴う就労能力の低下があります。

WORKSHOP REPORT

海外駐在社員への書類、資料の発送業務



身体障害の方はほとんどがバックグラウンドに疾病をお持ちですので、体調に表れる方も出てきています。今後、在宅勤務制度などの支援体制を整えることが必要になってくると思います」

「もう1つは、会社外の生活面の支援のあり方です。精神障害の方を中心に生活場面での支援、サポートをどう構築していくか。医療機関、地域の支援機関と地域生活のサポート体制を整えていっていただきますが、不十分さを感じています。障害者就業・生活支援センターをはじめとする支援機関が連携したサポートを、いままで以上にお願いたしたいと思います。定年の65歳まで勤めてほしいので、毎日出社してくるときの表情で調子がいいか悪いかを感じとっています。症状の波への支援体制、親亡き後など、会社外の支援が課題ですね」

「はーとふる」な会社になっ ています

7月から始めたトマトの水耕栽培は、フルットマトを販売している大塚化学の子会社アグリベストと業務提携。技術指導と生産品の販売のサポートをお願いしている。最初の収穫は9〜10月の予定で、西野さんは新しい事業に期待を寄せる。

「栽培技術と販路確保はできていますので、障害者が農業をやっている可能性を具現化していくことに注力しています。農業は阿波市で行いますが、後継者がいないのでうちの農地も借りてくれといわれます。障害者の力を生かして、農業の衰退を止めたい。長いスパンで取り組んでいきたいと思っています」

神崎さんは日々の仕事に手ごたえを感じている。

「最初のうちは心配なことがたくさんありましたが、3年経ってみんないきいきしています。同じ仲間が増えて、病気を隠さなくていい、補いあえる、仲間がいるから頑張れるというピアサポートの体制ができて、とても「はーとふる」な会社になってきていると思います。私は1人ひとりの顔を見て、実際に支援ができるのが楽しいし、うれしいです。ともに働けることに、すごくやりがいを感じています」

精神障害者とは無縁の世界にいたという森さんは、一般の人と変わらないの思いを持つようになった。

「障害者というと身体のイメージしかなく、最初はドキドキ状態でしたが、彼らと深く接するようになったら、薬でコントロールできれば健常の人と同じなのだと思えるようになりました。何の違和感もなく話して、一緒にソフトボールや卓球をしています。ただ社長と私はいずれ異動がありますので、ずっと見守っていけないのがちよつと心配です」

西野社長は、経営は社長の責務だと考えている。

「経営者として、会社の力をもっと強めていきたいと思っています。仕事を受注して収益を上げていけば、障害者の給料を上げられるし、もっとたくさん雇用もできます。大塚グループ発祥の地・徳島で、障害者雇用で徳島に貢献すること。精神障害にこだわらず、知的障害、身体障害のある方それぞれの適性に応じて、これからも雇用の場を広げていきたいと思っています。また、精神障害のある方への支援があれば働けることをいろいろなところでお話しして、ほかの企業さんに精神障害のある方を雇っていただくのも、はーとふる川内の責務だと思っています」

手厚いサポート体制で、職場にはピアサポートの雰囲気があったよう。将来が楽しみな会社がまた1つ増えた取材だった。